

水戸義公と其の修史事業

東京帝大教授
文學博士

深 作 安 文

凡そ洋の東西を問はず文化國民には一般に偉人物を偶像化する傾向がある。古今の偉人の傳を見ると、何れも其人物の美點を擧げ其業績を讃へて、之を理想に當代人を戒め勵ましてゐるが、多くは其讚美が潤色誇張に過ぎて眞實の姿から遠ざかつてゐる。既に乃木將軍の如きも今日では餘程偶像化されてゐると思はれるが、私が今茲に述べようとする徳川光圀卿即ち水戸義公も矢張り其例に漏れないのである。

義公が偶像化されて傳へられてゐる最も顯著な證據は、坊間流布の「水戸黃門記」である。これは講釋師の張扇から叩き出されてゐるばかりでなく、近頃は映畫劇にまで脚色されて諸方で映寫されてゐる。最近も其の續編とか云ふのが上映されて、人氣を煽つてゐるとの事であるが、これは今年七月が義

公の生誕三百年に當る爲でもあらうと思ふ。斯うして義公の人物が、廣く傳へられ、ば傳へらるゝ程、其の偶像化は一層その度を重ねるのである。

ところが茲に一つ義公の頗る結構な傳記がある。これは少しも夾雜物の無い、全く生一本の傳記で、而も義公自身筆を執つたものである。それは水戸市の北方五里、太田と云ふ町の郊外にある所の水戸家累代の墓所瑞龍山に義公が生前自ら建てられた壽像碑背の文である。此の碑文は文章其のものも優れてゐるし、且つ義公に關する眞實が述べられてゐるのであるから、短いものではあるが之を熟讀し翫味するといふと、義公の眞の姿相が髣髴として浮び來るのを感じるのである。私はこの碑文を基として暫く義公の人と爲りを語らうと思ふ。

先づ、碑は其の正面に「梅里先生之墓」とあつて、碑後には次の如く刻されてゐる。

先生常州水戸産也。其伯疾。其仲夭。先生夙夜陪膝下。戰々兢兢。其爲人也。不滯物。不著事。尊神儒而駁神儒。崇佛老而排佛老。常喜賓客。殆市于門。每有暇讀書。不求必解。歡不歡歡。憂不憂憂。月之夕。花之朝。斟酒適意。吟詩放情。聲色飲食不好其美。第宅器物不要其奇。有則隨有而樂育。無則任無而晏如。自蚤有志于編史。然罕書可徵。爰搜爰購。求之得之。微遜以稗官小說。撫實闕疑。正閔皇統。是非人臣。輯成一家之言。元祿庚午之冬。累乞骸骨致仕。初養兄之子爲嗣。遂立之以襲封。

先生之宿志。於是乎足矣。既而還郷。即日相攸於瑞龍山先瑩之側。瘞歷任之衣冠魚袋。載封載碑。自題曰梅里先生之墓。先生之靈。永在於此矣。嗚呼骨肉委天命。所終之處。水則施魚鼈。山則飽禽獸。何用劉伶之鍾乎哉。其銘曰

月雖隱瑞龍雲。

光暫留西山峯。

建碑勒銘者誰。

源光國字子龍。

簡潔にして而も能く一代を叙し得たりと云ふ可しである。

二

最初の「常州水戸産也」は説明を要しない。「其伯疾」は長兄頼重の事で、これは病身であつた。「其仲天」は龜丸である。義公は三男で妾腹であつたが、父頼房並に幕府の命黙止し難く家を嗣いだ。これが抑も義公をして深刻に自覺させた一つの理由である。本来ならば兄が嗣ぐべき家督を、兄を差措いて自分が水戸家の第二世となつたと云ふ事が、強く其の良心を刺戟したのである。「戦々兢兢」は其の心苦しさに戦いてゐる胸中を言ひ現したものである。「其爲人も不滯物」は、性豁達にして凝滯せず、物に囚はれない事である。次の「不着事」は、大局に通じて事務に拘束されず、又屈托しないことを指す。其の次の「尊神儒而駁神儒。崇佛老而排佛老」は、義公の學問信仰を窺ふに足る句である。水戸家では先代頼房の時から神道を尊んで荻原兼従の教を受けたが、義公も之を好んで、今井桐軒を遠く伊勢及び

京都に遣し神道を研究せしめられた。又、儒は少時から人見、辻等の侍讀に就いて研究せられた。さればこそ「學神儒」と記されたのである。けれども義公としては皇室を尊崇し、日本の國民道德を振起するのが本來の目的であるから、たとひ神儒を學んでもこの目的に副はぬものは排斥せられた。「崇佛老而非佛老」も亦同じ意味である。義公は随分多くの名僧を招いで寺院を興し、又老莊の書も見られた。随つて佛老の二道は共に之を崇めたのであるが、その己が目的に副はぬものは排斥したのである。「常喜賓客。殆市于門」は西山の隱棲地での事であるとせられてゐる。西山は山水幽邃で頗る遁世に適した所であるが、貴賤、僧俗、學者、文人等義公の徳を慕ふて集まり、實際其の門前に市する觀があつたのである。「毎有暇讀書。不求必解」は、その書を最後まで解し盡さうとしないのである。これは學者が兎もすれば却つて末節に囚はれてその精神を逸するやうなのとは異つて、大體の精神を把握すればそれを以て足れりとしたのである。「歡不_レ歡_レ歡。憂不_レ憂_レ憂」は一句一句それぞれ意味を持つてゐる。「歡不_レ歡_レ歡」は自分は三家の一人として何不足なく、又、副將軍として一般の尊敬を受けたのであつてそれは歡ばしい事であるが、而もそれには満足もせず、又甘んじもしないとの意味である。「憂不_レ憂_レ憂」は、義公には絶えず心配があつた。其の重なるものは當時の將軍綱吉とあまり仲が善くなかつた事である。世間では綱吉の事を、犬公方など、惡しざまにいふたのであるが、それは單に彼れの一側面であつ

て、中々聰明であり又相當學識もあつた。孔子廟を中心に昌平覺を建て、多數の學者を聘して大いに儒學を興したことは彼れの有名な事蹟であるが、自身も學を好んで講壇に立つた事さへある。又實母桂昌院に對しては甚だ孝行を盡し、之を本丸に迎へて手づから給仕に當つたとも傳へられ、世評には反して頗る光明面に富んだ人である。義公も亦聰明で飽くまで識見超邁の人である。寧ろ意氣が投合しさうなものであるが、義公は道義を重んずる人格者であるのに、綱吉は晩年に犬を熱愛して其の爲には人命をさへ奪ふやうな道義に反する事をしたので、二人の間は兎角面白くなかつた。又當時將軍の權勢は天下に並ぶ者がなかつたのであるが義公も亦相當大きな勢力を有し、副將軍として隱然重きを成し、その上深く朝廷を尊び奉つたことも更に兩者の融和を妨げる原因であつた。義公の心配は此の外にもまだ在つた事と思ふが第一に思ひ當るのは此の事である。「月之夕。花之朝。斟酒適意。吟詩放情。」は義公の風流韻事に關する一面である。義公には詩歌の作もあり、書畫にも秀でゝゐて、趣味の側からだけ觀ても立派な人であつた。「聲色飲食不_レ好_二其美_一。第宅器物不_レ要_二其奇_一。」は世の有りふれた成金者流の如く強ひて珍奇な物を蒐めてこれを誇るやうな事のないことで、「有則隨有而樂育。無則任無而晏如。」と云ふ風であつた。

三

以上は専ら其性情起居を叙したのであるが、「自蚤有志于編史」から、「輯成一家之言」までは、義公の修史事業の叙述である。義公は十八歳の時に史記の伯夷傳を讀んで頗る感激し、以來大いに發奮して、書籍の貴いこと、特に史書の貴いことを自覺し、書籍に依らねば志を後世に遺すことが出來ず、又當代を指導することも出來ないとして、茲に初めて大日本史編纂の志を立てられた。しかし乍ら「然罕書可徵」で、當時は戰國時代の餘を受けて、貴重な文献は多く散逸し、必要な參考書が思ふやうに手に入らないのであつた。爲に諸方に人を派して「爰搜爰購」、藩封の三分の一は殆ど修史事業に費して了つた。水藩が三家の中でも最も貧しかつたのは、一つには封祿が尾紀二藩に比して少かつた爲であるが、一つには修史事業に、藩封の三分の一を向けた爲であつた。「微遜以稗官小説」とは正史以外に小説本のやうなものまで多少參考に供したといふ意味である。「撫實闕疑」は直言直筆して努めて潤飾を戒めることであつて、「正閭皇統是非人臣」と云ふのが大日本史編纂の大精神である。大日本史は恐れ多い事ながら、天皇皇后に對し奉つてまでも價值判斷を加へ奉つて居るのである。又將軍傳を設けて、名は假令將軍であつてもその實、天皇の事を行ふのは洵に相濟まないといふ意味をあらはしたのである。この調子で叛臣傳、逆臣傳まで書いて褒貶の意を寓したのである。其の「輯成一家言。」とは、決して公論ではないといつて謙遜せられたのである。「元祿庚午之冬。累乞骸骨致仕」は再三隱居を願ひ出でて

漸く許されたことである。「初養兄之子爲嗣」に就いては義公の義たる所以を物語る話がある。已に長兄があるのに自分が父の後を繼ぐことは義公の良心の許さぬ所であるが、父の命、將軍の命である以上據なく世嗣とならねばならぬ。併しそれでは自分の氣が濟まぬところから、愈々將軍から正式の命令を傳へる使者が來る前夜に、長兄頼重と二人の弟御を父君の位牌の前に招じて「自分は兄を差置いて家を嗣ぐことは情として實に忍びないのであるが、父の命將軍の命には服従せねばならぬ。就いては茲に一つの願がある。それは自分の子が生れてもそれには後を繼がせず、家督は兄上の御子に譲りたいと思ふ。さうすれば水戸家は再び正系の相續者に、復するのであるから、枉げて此の儀を御承引ありたい。さなくば明日の上意はお受を致さぬ覺悟である。」と言はれた。すると兄君にはそれを否んで、「それでは父の志が無になる、自分としては父の精神を蹂躪することは出来ぬ」と反對したので、義公は、然らば自分としては明日の上意をお請けしないまで、あると快からぬ顔色をして退座せられた。そこで二人の弟御は、これは重大事であると見て、長兄にはあれ程までに決心してゐる義公の願を一圖に拒まれたのは宜しくない。どうか水戸家の爲に公の願を承知して下さいと諫めたので、長兄にも漸く承諾し、養子の事も定まつて義公は命を受けたのである。「遂立之以襲封。先生宿志於是乎足矣」は其の結果を語るもので、寛文十一年頼重の子綱條を世子に立て、後、元祿三年致仕し、封を綱條に讓つて、初めて宿志を

達したと其の胸中を述べられたのである。斯くして「既還郷即日相攸於瑞龍山先塋之側。瘞歷任衣冠魚袋。載封載碑。自題曰梅里先生之墓。先生之靈永在於此矣。嗚呼骨肉委天命所終之處」で、死後の骨や肉の始末は憂ふるに及ばない。之を天命のまゝに任せて置けばそれで可い。我が靈は既に此の碑に宿つてゐる以上、其の形骸たる骨肉は畢竟空しいものであるから、「水則施魚鼈。山則飽禽獸」のみであるとするのである。察する所此の邊の思想は佛老の方から來たもので、「生は寄なり。死は歸なり」と觀じて死に向つて少しも執着のない心持が能く現はれてゐる。されば即ち、「何用劉伶之鍾乎哉」で、晋書に出てゐる劉伶と云ふ人は大層酒を好んで平生酒壺を携へて鹿車に乗り、供の者に常に鍾を荷はせて、自分が死んだならば其所に埋めて呉れと云ひつけて置いて天下に放浪したといふが、義公は己に骨肉を魚鼈禽獸に與へる以上、埋葬の心配は要らないのである。其の餘は銘文で、特に説明するまでもないと思ふから略する。

四

以上が義公の人と爲りの大體であるが、進んで其の修史事業に就いて述べて見たい。

私は先きほど義公が十八歳の時に初めて史記の伯夷傳を讀んで大いに感激し、修史の志を抱くに至つたと云ふことを述べたが、義公一代の大事業たる大日本史編纂の事を語るには、この點に就いて今少し

詳しく述べる必要がある。

伯夷傳とは人も知る如く殷時代の孤竹君といふ者の二子伯夷叔齊の事を司馬遷の書いたものである。孤竹君は年下の叔齊の方を愛して自分の死後は叔齊に嗣がせようとした。父の死するや叔齊は己れ父の後を嗣ぐは次序を紊るものであると云つて之を肯んじなかつた。ところが、兄伯夷は父の志を尊んで弟に嗣がせむとして固より自ら嗣ぐ考はなかつた。かくて、兄弟互に相譲つて果てしがなかつた。そこで國人が仕方なしに、取計らつてその仲子を立てた。二人は茲に始めて心の重荷を下ろしたのであつたが、當時、殷王紂は暴君であつた爲に、周の武王は兵を擧げて之を伐たうとした。併し武王は紂王にとつては臣下であるから何としても臣が君を伐つと云ふのは宜しくない。然るに武王は此の事を敢てするのみか、父西伯が死んでまだ葬式も済さないのに妄に干戈を動かすのは忠孝二つながら、之を蹂躪するものである、そこで、伯夷叔齊は今や進發せむとする武王の馬前に遮り立つて、馬を叩いて諫め、父死して葬らず爰に干戈に及ぶ、孝と謂ふ可けんや、臣を以て君を弑す仁と謂ふ可けんやと諫めたが、武王は之を聽かないで紂王を伐ち、遂に殷を滅ぼして自ら天子と爲つた。二人は武王の治下に立つて周の粟を食むのは耻辱であると云つて、首陽山に隠れて薇を采つて食してゐたが、遂に餓死した。此の話が史記には非常に立派な文章で書かれてある。十八歳の義公これを讀んで大いに感奮したには公私兩面の理

由がある。其の私的方面では、叔齊が兄を差措いて家督を嗣ぐやうにと云つた父の遺命に背いてまでも伯夷に對して義を立て通したことである。己れは如何にと云ふに、父の命に従つて兄を差措いておめめと家を嗣いでゐるのである。その深く自責を感じたのは自然の事である。次に公的方面の理由としては、假令紂王は暴君であつても武王が臣の身として之を伐つのは斷じて宜しくない。人臣の道から見ても實際は天子の事を行ひ、其の勢力は強大であつて、人民は只將軍あるを知つて天皇あるを知らないのである。これ亦看過すべからざる事實である。これが義公が深く胸に感じたところである。そこで夷齊の高義を慕ひ、卷を撫して書物が無ければ昔の事を知ることが出来ない、書物と云ふ貴い物があつたればこそ、斯の如き高尚な道徳を味ふことが出来たのである、書物の中でも歴史に依らなければ後人を感じしめることは出来ない、自分はこれから國史を修して古人の行動に嚴正なる價值判斷を加へ、これを後人に示すところあらう、といつて修史の志を立てたのであつた。

以上は大日本史の序文に見えてゐる義公修史の動機であるが、如何なる直接原因があつたにもせよ、僅に十八歳の貴公子が斯くまでに深刻な自覺を惹起したのには、更に其の根柢に於て何ものかゞ無ければならぬ。それは義公の勤王心であらねばならぬ。

義公の勤王心の由來については、今日では次の如き推斷が下されてゐる。

義公の父君頼房公は好學の人で自らも學問を致し、若君達にも學ばせたのであるが、義公は幼時學問を嫌うて、兎角勉強を怠りがちであつた。父君はこれを憂ひられ、何とかして好學の人にしたいものであると考へられて特に京都から人見、辻の二學者を招ぎ、之を侍讀としてその父家康公から戴いた種々の良書を講讀せしめた。義公が熱心なる讀書人となつたのはそれ以來の事である。即ち義公好學の精神は全く父君の力によつて養はれたのである。此の頼房公は嘗に好學の人であつたのみならず、神道を尊とび萩原兼從に就いて唯一宗源の旨を學んだ。神道の研究は自ら國體觀念を明にし勤王の志を深からしめるのである。頼房公が初めて京都へ出たのは元和九年六月に秀忠に同伴してゝあつたが、其の後も上洛して禁闕を拜し、承應二年六月皇居炎上の時には、早速使を遣して天機を奉伺させてゐる。又毎年正月には年頭の御祝儀として太刀を献上せられた。斯様なことは當時の諸侯の間では珍しい事であつた。何となれば秀忠の將軍時代と云へば徳川家の勢威の頗る盛んな時であつて、多くは朝廷に忠を盡し奉るよりも幕府に倣するに忙しかつたからである。義公は斯様な頼房公から不知不識の裡に感化を受けてその勤王心に培はれたのであらう。

義公の生母谷氏は家臣三木之次の宅で産の紐を解かれた。義公生誕後は専ら之次の妻武佐が之を保育した。此の婦人は頼房の乳母であつたが、其の以前は後陽成天皇の中宮中和門院に奉仕して居つた者で、中々の女丈夫であつた。此の婦人が常に色々と禁中のことを義公に語り聞かせたのであつた。これ亦義公の忠義心を養成するに與つて力があつたらうと信ぜられる。加之、此の婦人は日蓮宗の信者であつたが、日蓮は日本の産み出した傑僧の一人で、皇室中心主義の思想を把持し、常に皇室を尊崇して北條幕府を排斥したから、武佐の信仰を通して日蓮の思想が義公に傳はつたこともこれを想像するに難くない。

今一つは地理的環境の感化である。義公が生れた常陸國其のもの持つてゐた事情である。常陸には鹿島神宮がある。これは有名な健甕槌命を奉祀した社である。命は神代に於て中國平定に功勞のあつた神である。今の宮地は此の神が東方征服のため足跡を印した所であると云はれてゐるのであるが、此の神宮に對する常陸人の崇敬は非常なもので、今日人の旅立を鹿島立と云ふ理由は、昔、武人の出征に臨んで武運長久の祈を捧げるために、鹿島神宮へ參詣に赴く所から起つたと傳へられる、されば義公が常陸人として此の神の威靈に感化せられたことはこれを想像するに難くないのである。

鹿島神宮近くに大織冠の宮といふがある。土俗傳へて、藤原鎌足の生れた所であるといつて、これ亦

義公の勤王心と幾分の關係があつたかも知れぬ。

なほ又筑波山下に小田郷があるが、これは南朝の柱石として皇胤を奉じ、奥羽を南朝の勢力下に置かうとして船にて出發し常陸に漂着した北畠親房の據つた小田城のあつた地である。國史に據るに親房は延元三年其子顯能と共に義良親王を奉じて海路奥州に赴く途中、颶風に會うて吹流され、友船と相失して常陸の海岸に漂着したので、利根川から霞が浦まで來て上陸したとの事であるが、その上陸地點は今日の神宮寺の邊で、今に上場の名が残つてゐる。それから先づ關城に入り、次に小田城に入り其處に立籠つて敵將高師冬に對抗しつゝ、筆を執つて神皇正統記を著はしたことは有名な事實である。此書が我が日本の國體を闡明する上に極めて大切な文獻であり、殊に何處までも南朝を正統とした立派な史論であることは改めて云ふまでもないが、親房の此の事蹟が義公の忠義心に培つた重なる外的理由であつたことはこれ亦疑を容れない所であらう。私はこれ等の内外の事情が相合して働いて義公をして絶代の勤王家たらしめたのであると考へる。

六

義公が修史の志を起した理由は以上の如くであるが、當時は亂世の後を受けた爲に容易に參考書が手に入らない。そこで義公はその侍講であつた人見、辻の二名に協議したが、兩名は口を揃へて、其の頗

る難事業であることを説き、嘗に参考書の蒐集が容易でないのみでなく、第一それを書く學者があるまいと云つた。併し義公はこれを聽かず、自ら其の捜査に當つて數多の書を讀破し、必要な箇處には紙を貼つて、一意編史事業に精進せられた。斯くして水戸學なるものが義公を中心に大日本史の編纂事業と並行してその形を具へたのである。

大日本史の編纂事業は、普通、二期に區劃せられるのである。即ち義公中心時代と烈公（齊昭）中心時代とであるが、私は之を三期に劃した方が適當ではないかと思ふ。即ち第一期は義公中心時代、第二期は文公（治保）中心時代、第三期は烈公中心時代である。第一期に於て義公の大事業を翼賛した主なる學者は安積澹泊、栗山潜鋒、三宅觀瀾、森儼塾などが代表的な人々で、殊に安積澹泊は非常に優秀な頭腦の所有者であつた。學者が集つて大日本史を編纂した彰考館は初め江戸の水戸邸に造り、後には水戸にも建てたが、澹泊は明暦三年に江戸の彰考館が建てられた前の年に生れて、元文二年八十二歳で死んでゐる。此の間、大日本史の本紀と列傳とは殆ど獨力で書上げたと云つて宜しいのである。次の文公中心時代にも亦、立派な學者が修史事業に努力してゐる。例へば立原翠軒、長久保赤水、小宮山楓軒、藤田幽谷、高橋坦室、青山雲龍等が即ちそれである。義公の歿後文公時代に至るまで約百年の間は、修史事業も停滯してゐたのであるが、文公に至つて是等の諸學者が努力した爲に著しく進歩した。私が特

に、文公中心時代を立てたいと思ふのは之が爲である。最後の第三期を烈公中心とする。此の時代の學者には、藤田東湖、會澤正志齋、青山佩弦、豊田天功等が算へられる。是等の人々は主として志類の編纂に力を致した。

大日本史の編纂についてはいろく述べたいことがあるが、今はその三特筆と云ふことを一瞥することとする。

三特筆の第一は神功皇后を后妃傳に列したことである。皇后は仲哀天皇の皇后であらせられたが、女性の御身を以て新羅を御征伐遊ばされ、日本の國威を海外にまで輝かされたお方であるので、在來の史書の中には之を天皇としてお取扱ひ申したものがあつた。扶桑略記の如き即ちこれである。又日本書紀の如きも天皇とは書し奉らなかつたが、第八卷は仲哀紀、第十卷は應神紀とし、此の父子兩帝の間に、第九卷として神功紀を挿んでゐる。これで見ると日本書紀も亦事實上神功皇后を天皇として遇し奉つてゐるのである。ところが義公は之に異議を挾んで、特に之を列傳中の后妃傳に引下げてしまつた。これは確に大日本史獨特の見識である。

七

そもく如何なる理由で斯の如き果斷な事をせられたかと云ふに、神功皇后は仲哀天皇の皇后として

九州親征に陪し、其の時に應神天皇を懷孕せられたのである。されば仲哀天皇が崩御になつた後は、其の胎中の御子が即ち天皇であらせられる。即ち胎中天皇である。皇后は御妊娠の御身を以て新羅を征伐したまひ、九州にお歸りになつて御出産遊ばされたが御子は御生誕になる前からして既に胎中天皇であらせられるのであればお生れになれば直に皇位に即け奉るべきである。然るに皇后はこの手續をお踐みにならないで六十九年と云ふ長い間攝政として天子の事を行ひ給うたのである。これはどうも宜しくないと義公は云ふのである。元來水戸學は義理の學である、我々人間の社會生活には義理と人情の兩者が働くのであるが、これは畢竟兩極であつて多くは共在を許さない、一方を立てれば他方が立たぬ。其處に人生の苦惱があり、煩悶があるのである。近松は、その優麗な筆致で義理と人情との葛藤の間に生れる悲劇を取扱つて才名を馳せたが、この人情を捨て、専ら義理を取り、之を以て價值判斷の標準としたものが即ち水戸學である。この故に神功皇后に對し奉つても専ら義理と云ふ絶對標準の上から價值判斷を下して、一方では新羅御征伐といふ非常な勳功をお立てになつたにも拘はらず、天子の事に指をお染めになつたのは義理に反した事であるとして后妃傳に列し奉つてしまつたのである。これは扶桑略記や日本書紀の立場を全然覆へしたものであつて、實に峻嚴を極めた態度である。水戸學の本領は義理の前には斷乎として一切を抛つて憚らぬところにある。

大日本史の本紀及び列傳を書いた者が安積澹泊であることは前にも述べた通りであるが、澹泊は尙其の外にも、一々の紀傳に附すべき贊を書いた。ところが文公の時代になつて、この贊は人臣を以て妄に天邊の事を批判し奉つては宜しくないから載せぬ方がよからうと云ふ議論が出て之を削り去つた。現存の大日本史に贊が無いのは其の爲であるが、これは結構な文字であるから、之を散逸させるのは惜しいと云つて別に刊行されたのが、今日残つてゐる大日本史贊藪である。此の大日本史贊藪は澹泊の炬の如き史眼が窺はれるもので、頼山陽などは頗る之を愛讀した。彼れの日本政記や日本外史の議論の部分は、餘程これに負ふ所があるのである。現に山陽が大日本史贊藪に跋を書いて賞讃してゐる。其の贊藪では、澹泊が神功皇后を如何に評し奉つてゐるかと云ふに、胎中の御子は仲哀天皇の崩御後に御生誕になられたのであるから、直ちに之を天子となし奉るべきである。然るにさはせず四年たつてから皇太子とせられて、御自身は約七十年の間攝政として天子の事をせられた。これは誠に御同意の申上げられぬ事である。それが爲に應神天皇は畏くも六十餘年の間御部屋住であらせられ、七十歳を越えてやうやく天位に登られた。若し萬一不幸にして皇后攝政の間に皇太子が薨せられるやうなことがあつたならば日本の皇統はどうなつたであらうか實に寒心の極みであるが、幸に其の事なく、應神天皇の御即位を拜することを得たのは誠に天佑であつて、到底人力の及ぶ所ではないと論じてゐる。

八

特筆の第二は大友皇子の御傳を天皇紀中に引上げた事である。大友皇子は天智天皇大漸の時皇太子とならせられその崩せられるや天皇の御位に即かせられたのである。これより先き天智天皇は皇弟大海人皇子を以て皇太子とせられ、御病氣になられてから後事を御頼みになつた。ところが大海人皇子は皇太子の位を辭し、且つ剃髮して吉野に入られた。時の人は之を評して虎を野に放つが如くであると言つた。天皇は大海人皇子が去られたので大友皇子を以て皇太子とせられ太子は天皇崩せられるや即位せられたのである。然るに大海人皇子は急に兵を擧げて天皇大友を滅し奉り、自ら皇位に即かれた。これが即ち天武天皇であつて、世に之を壬申の亂といつてゐる。大日本史以前の史書では總て之を皇子と稱し奉るに止め、天智天皇の次には天武天皇を配してゐたのである。ところが大日本史に於ては、斷然大義に依つて之をさばき天皇大友と稱したのである。成る程、大海人皇子は一時皇太子となられたに相違ないが、天智天皇大漸のときこれを辭せられたのであるから、最早皇太子ではない。隨つて天位に登られる資格もない。次代の天皇とならせらるべき御方は當然、新皇太子大友皇子である。況して大友皇子は天智天皇の崩御後天皇となられたのである。然るに大海人皇子は敢て兵を動かして大友天皇を除き奉つたのであるから、非常な罪を犯されたわけである。そこで大日本史では、何處までも事實は事實として

明らかに書かねばならぬとして、斷然天皇大友とせられたのである。これ亦畢竟義理の上から天武天皇の御行跡を評價し奉つたのであつて、其の史筆の嚴格さを見るべきである。

贊敷では此の事を何と評し奉つてゐるかといふに、是を是とし非を非とするのは天下の公論である。然るに壬申の變については世人がその是非を辨ぜず真相が隠れて顯はれぬのは歎かましい事である。日本書紀は大友皇子を以て天皇とせず天智天皇の次に天武天皇を叙し奉つてゐる。これは舍人親王が私的には天武天皇の御子様であり、公的には臣下であるから直筆を避けられたのである。それでも大友皇子の側を「近江朝廷」と書いてあるあたりは隠さうとして現はれたのである。今は私意を以てこれをさばかず舊史によつて天皇大友を本紀にかけて天下の公論に従ふのであると論じてゐる。

九

最後の特筆は南朝を正統となし北朝を閏統と斷じた事である。これまでは當今の天皇は北朝の御血統である、元來北朝が御兄様の御血統であらせられるといふ論があつた。義公は斷然斯の如き俗論を否定して、畏くも天祖が三種の神器を皇孫に傳へさせ給ふた御精神を尊び奉り、これを神器の在る所即ち正統であらせられる、南朝はこれを北朝に比べて御實勢こそ劣つてあつたが、五十七年の間儼として神器を御保持あらせられたのであるから、正統であると斷ぜられたのである。これは三大特筆の中で最も重

大な事で、當時彰考館の學者の中にも、これには反對を唱へた者があつたが、義公は毅然として之に動かされず、此の事だけは予に一任せよ、天下後世子を罪する者があつても大義の存する所、どうして筆を曲げることが出来ようと飽くまでも其の主張を貫かれた。斯ういふわけで南朝正統論は義公の眞面目の存するところであるが、これが由來に至つては神皇正統記の論を承けたものである。即ち親房卿は此の書に於て、既に神器の在る所を正統とする議論を立てゝゐるのである。ところが此の論を彰考館の史臣として最も正大な態度で主張した者は栗山潜鋒である。彼は頗る見識の高かつた人で二十三歳初めて水戸家に出仕して重用せられ、主として南北朝の部分に筆を執つた。義公をして神器の在るところ即ち正統であるとの主張を固く執らしめたのも畢竟彼の力が與つてゐる。

これで大日本史三特筆の説明は済んだのであるが、大日本史の眞骨頭たる皇統正閏論と並んで特色のあるのは、義公壽像の碑に於て之を對記されてゐる、人臣是非の論である。水戸學は此の「正閏皇統是非人臣」を斷行した學問であると云つて可い。畏くも皇室と雖も義理の篩にかけ奉るのであるから決して人臣に對しては徹底的に其の是非善惡を明かにしてゐる。楠、新田の如き飽くまでも大義に終始した忠臣は之を賞讃し、其の反對に叛逆の臣は假借なく筆誅を加へてゐる。大日本史の列傳の終りに叛臣傳、逆臣傳の二項目が特に設けられてゐて、其の叛臣傳中には弓削道鏡、平將門、藤原純友、源義朝、源義仲

等を數へ、逆臣傳には崇峻帝を弑し奉つた蘇我馬子の外にその子蝦夷、その孫入鹿を加へて、第二百三十三卷は蘇我氏三名で占めてゐる。紙數にすれば僅に三枚であるが、而も之を疎かにせないのは、其の志のあるところの窺はれるところである。叛は謀叛であるが逆は畏くも天皇に對し奉りて指を染め奉つたことを指すのである。これが即ち人臣是非であつて、皇統正閏と共に大日本史の精神を成してゐるのである。

終りに大日本史の卷數を云ふと、歷代天皇の御事蹟を叙した本紀が七十三卷、皇妃・皇子・皇女・群臣・將軍・將軍家族・將軍家臣・文學・歌人・孝子・義烈・列女・隱逸・方伎・叛臣・逆臣・諸蕃等の事を記した列傳が百七十卷で、此の合計が二百四十三卷、次に志類は神祇・氏族・職官・國郡・食貨・禮樂・兵・刑・陰陽・佛事の十志、表類は臣連二造・公卿・國郡司・藏人檢非違使・將軍僚屬の五表で、此の合計が百五十五表、之に目錄五卷を加へて總計四百三卷に上るのである。これだけの大部の書物を完成するには義公以下十二世、二百五十年の時日を要したのである。其の間君臣何れもその心血を注いだのであるが、其の努力の結晶は、やがて明治維新の風雲を卷起す思想上の原動力となつたのである。明治三十三年十一月に、明治天皇が大演習御統監のため常陸に、臨幸された時に、忝くも義公の功績を嘉して之に正一位を贈らせられたが、其の勅宣は左の如くである。

贈従一位徳川光國夙ニ皇道ノ隱晦ヲ慨ヒ深ク武門ノ驕盈ヲ恐レ名分ヲ明ニシテ志ヲ筆削ニ託シ正邪ヲ辨シテ意ヲ勸懲ニ致セリ洵ニ是レ勤王ノ倡首ニシテ實ニ復古ノ指南タリ朕適マ常陸ニ幸シ追念轉々切ナリ更ニ正一位ヲ贈リ以テ朕カ意ヲ明ニス

これはこれ唯今以て水戸人が感激の涙を以て捧讀するところである。

因に、右は本會が特に五月の例會を以て勅王の偉人水戸義公生誕の三百年記念講演を舉行した際の深作博士の講演筆記である。（澁口生筆記）

LIST OF THE BOOKS DONATED BY
MRS. SALWEY, MEMBER OF THE
MEIJI JAPAN SOCIETY, TO THE
LIBRARY OF THE SOCIETY

1. German-English and English-German Dictionary.
2. Morris, War in Korea.
3. Karakaria, India.
4. A. Lloyd, Creed of Half Japan.
5. Nukariya, Religion of the Samurai.
6. T. Richard, New Testament of Higher Buddhism.
7. De Benneville, Benkei (2 vols).
8. Various Papers by Mrs. C. Salwey.